Fate will be spring

孤独の旅人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺には何も守れなかった，理想も，愛する後輩も，親友も，妹も……だから，今度こそ，守ってみせる！

プリズマの美遊兄がｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　の士郎となって生きる話

目次

第一話 …… 1
第二話 …… 7

第一話

守れなかった，何も…
信じ続けた理想
愛する後輩
親しい親友
あぁ，自分に対して憎悪感しかない…

それでも，俺は唯一の大切な人をようやく守った。
「勝ったぞ，切嗣」
美遊をこの残酷な世界から解放した。美遊はこれから幸せで生きることができるはずだ。
本当に… 良かった…
「あぁぁぁ……」
自分の結末はとうの昔から知っている。それでもここまで進んでいた，故に，後悔はない。
でも，もし良かったら，美遊と共に…

「お兄ちゃん… 幸せに生きて…」
美遊の声がした，あぁ… 死ぬ前の幻か，もはやその幻に声をかける力もない。乖離剣の衝撃を受けて即死ではなかったのは幸運だったか，それでも，体はもう限界だ。
「大好きだよ… お兄ちゃん！」
その言葉と共に，意識が海に沈むように落ちていた。

目を開いたら，そこには赤い地獄であった。
「え！」
バカな！生きているだと！ありえない！即にこの体は死んだ身だ。
しかし，現実は考える時間をくれなかった・・・ 目の前は火の海，焼かれた都市の残骸，そして無数の死体・・・
焼かれた死体の匂いは焦げた料理みたいだ，
「誰か・・・ 助けて・・・」
助けてを求める声が聞こえた，助けるつもりはあったが，
「お願い，この子だけでも！」
「やだ！死にたくない」
「あなた！あなた！」
「クッソ！いやだいやだ！」
・・・・・・・

この様に，余りにもの数で，救世主でもない俺にとって無理だ。
「トレース　オン」
それでも，助けられる人なら助けたい。それは俺の信条だ，馴染みのある呪文を口にするか，
「な・・ 何にも起こらない！」
いや，そもそもこの体に魔術回路など通ってない。そして気づいた，この体はまた少年である事を，
「――――――――すまない」
俺にはその言葉しかかけなかった。
当然だろう，何も守れなかった俺にとって，助ける人はごく一部ではない。全てを救うなんで，今の俺ができないし，もうしようと思わない。
助けを求める声を後にして，俺は歩き始めた。

「あ…　が…　あああああ！」
早くこの地獄か出たいか，少年の体はもう保たない。
「ああ…　ああ…　ああああああああああああああああああああああああああ!!」
それでも，意識を飛ばないため，俺は叫びながら歩いている。この地獄に勝つ意欲，いや，単に生きたいの感情が俺を押している。
だか，俺が俺の意識に勝ても，体の疲労には勝てない。
「ああ…　ああ…　あ……」
なんだ，倒れたかと軽かる思っていた。目を上げると，丸い円の中から何かが溢れている。なんだろうと思うが，今はそれではない，早く立たないと，
「ああ…　ああ…　ああ…」
無理だ。と体は訴っている，
「そうか，死ぬのか」
本当に酷い話よ，目が覚めたら訳わからない地獄のど真ん中にいて，なんの説明も無しで死ぬとか。
「まぁ，これも報いか…」
守る物がない俺にとって，この命はもうどうでもいい
その死を受け取って，ゆっくりと目を閉じた。

「生きている，生きている！」
何時間経っただろう，一分？一時間？それでもこれも幻？
「ありがとう！本当にありがとう！」
懐かしい声を聞こえた，この声は
「ありがとう！本当にありがとう！」
目を開くと，その男はまるで俺ではなく彼の方が助かった様な笑顔

をしながらこの言葉を呟いた。
きっと彼はこの奇跡に感謝しているだろう。そして，何でそんなに幸せそうな顔をしているか？

キリツグ・・・・・
そして，意識がまた落ちた。

目が覚めた時，目の前には白い天井とライトがあった。正確は上だけど。消毒液の匂いが空に漂う，真っ白な部屋の中，隣には数人の子供もいる。
「病院か・・・」
それはそうだろう，あの時あの様に助けられて，病院に運ばないとどこに運ぶ？墓地に？
「それでも，この体は酷いな・・・」
改めてこの体を見直すと，ほぼ若返りの感じがする。まるで数年前に戻ったの様な感じ。
だか体が若返ったとしても，この心はすでに冷厳になっていた。
「いや，無駄話はやめよ」
問題はここからだ，俺は何で生きている，何だあの紅い地獄，そして・・・
「切嗣・・・」
俺の父であり，恩師であり・・・・・ 憧れた人だった。
世界を救うため，何でも切り捨てることができる英雄だった。

鉄製のドアが開け重い音を出す
来ている人は，エミヤキリツグだ。

俺も含め，この部屋にいる子供達の視線は彼に集中した。
黒いスーツ，雑な髪，大きいな箱を持っている。
一番知っている人だけど，その顔は俺の知ってる切嗣ではない。何といえばいいのか，彼はもう…
「こんにちは，あなたが士郎君だよね。」
その顔，その優しさ，彼は正義の味方に対して……
絶望した……
俺の知ってる切嗣は，確か諦めたか，絶望まではしなかった。この切嗣は何かあったか知らないか，彼は，恐らく全てを失っただろう。
彼は英雄エミヤキリツグではなく，ただの衛宮切嗣だ。
その顔は不器用の笑顔をしながら，俺に，
「率直に聞こう，このまま孤児院に預かるか？それでも僕の家に来るか？」
そう言った瞬間，俺に子供達の憎む視線が殺到した。まぁ当然だろう，失った人にとって，また手に入れる俺は悪魔だろう。気持ちも分からなくもないが，俺には，どうすることもできない。
当然，俺は切嗣を選んだ。
切嗣が俺の選択を見た時，彼のほっとした顔が見えた。
「そうだね，うちに来るのは色々準備しないといけないね，」
持ち物の箱を地面に置いて開けようと，

「そうそう，先に言えないといけないことがある。」
そう言って，その不器用の顔は神秘的な笑顔をして，
「俺は，魔法使いだ。」

正確は魔術だろう。以前この様に切嗣を魔法使いと付けると，いつもクールにこれは魔術だなんかを言い出した。
その言葉の重み，俺は知っている。世界の為，正義の味方となり，魔術を使って，悪を滅びる。
例え，彼自身が悪魔になっても……

知っているこそ，俺は
「すごいな！おじいさん！魔法何で！」
俺は，この切嗣が幸せになって欲しい……
いつか，彼自身に春が来る様に……

第二話

衛宮家にいることは，楽しかった。
いや，家は同じでも，住む人が違えば，ここまで違うとか，正直，驚いた。
「士郎～ご飯また？」
「未だだよ藤姉，て言うか，未だ五時半だぞ！」
「ふん～だ，姉がお腹が空いたとか言っても士郎はご飯くれないの？お姉ちゃん，ショック！」
「だから早いよこのタイカ！」
「ああ！あだ名を読んだな！士郎に痛みを付けないと～」
「まぁまぁタイカちゃん今日大会だし，お腹が空くのが早いのは当然だろう，今日は早く飯をしようぜ士郎」

藤村大河，あだ名冬木の虎、タイカ、
うちの家の朝食と夕食にいつも来るこの虎，食料は半端ない。隣の藤村組の令嬢とか何とか，俺と切嗣にとって家族その一人。
余談だが，藤姉の剣道は強いか，いつも俺が勝つ。以前の様な身体能力はないが，隙だらけのタイカには手抜いても勝てる。

俺は他の世界から来た衛宮士郎は病院で目が覚めた時で分かった。その時自分の顔が見えなくとも，自分の声で判断がついた。最初は驚いたけどぴっくりまではしなかった。
並行世界，美遊をエインズワースから逃れる為，彼女を並行世界に飛ばした。
頑張っているかな……　美遊……
いや，今の俺には何もできない……
その十分後，俺たちは食事を始めた。そうしないと藤姉が暴れ出すことになる。
「それでね，その英語の先生が沢山の宿題を出したの！」
「自業自得だろう藤姉，大学の授業で寝て……」

「ふん～だ，どうせ士郎もやっているでしょ～」
「いや，ちゃんと授業聞いています，何処かの野生動物ではなく……」
「酷い！酷いよ士郎！お姉ちゃん，泣く，切嗣さん，なんか言ってやれ！」
「まあまあ二人共，喧嘩はするな，喧嘩は良くない，さあ食べましょ，ご飯を」

切嗣はいつもこんな感じ，家では威厳が感じない，俺たちの喧嘩をいつも仲介している。
正直，少し安心した。俺の世界の切嗣は無情だった。世界の為なら何でも切り捨てる男，そして彼の最後はもう何も残っていない。
しかし，この切嗣にはそう感じない。確かに彼は大切な物が失っていただろう，しかし俺たちが彼の心の穴を塞げている。
あの災難から五年，いつもの様の穏やかな食卓だ。

「うわーご馳走様でした。」
「ご馳走様」
「お粗末よ，二人共。」
「いや！相変わらずの美味でしたね。」
そう言って，床に倒れた……　流石野生……
「そうだね，士郎の作る料理でいつも美味しいよね，あ，タイカちゃん，今日はどうする？」
「今日は早めに帰ります，色々ありますので，あ送らなくでもいいですよ。」
「ダメだよタイカちゃん，道で不審な人と会ったら，」
「大丈夫だよ爺さん，未だ明るいし，そして，なんかあったら藤姉がきっとババで倒すことになるし，」
「そうだね，ハハハ～」
否定ができないの切嗣を見て，藤姉の機嫌が一気に下がった。

藤姉の機嫌を直して，彼女がそのまま家に帰った。
機嫌を直す為相当苦労した……

「士郎，風呂が沸いたから先に入って，あぁ今日あれの鍛錬しなくていいから庭に来て」

「……うん，分かった。」

当然あれは魔術のことだ。
この体は元々魔術回路が通ってない。故に簡単な投影すら出来ない。勝手に回路を通すなど切嗣に感じられるから，切嗣に魔術を教えてもらった。
当然，簡単には教えてもらってない。切嗣は魔術の危険性を良く知っている。知っているこそ俺を巻き込みたくないだろう。
でも，知っているこそ俺はやらなくてらならない。この世界の切嗣を見て，やはりあれはあるはずだ。

聖杯戦争

魔術に関しては半人前だ，アンジェリカと戦闘する時の力はないが，以前のこの時期に比べて結構強くなった気がする。

いや，戻っているの方が正しい。
切嗣には投影した物が消えないことを隠している。もちろん，俺が並行世界の住人と言う事実も隠している。まぁ話すとしようかなと時々考えているけど。
正直，話したくない，そっちから聞かない場合

お風呂から上がって，俺は庭に出た。
切嗣は縁側に座って，上の月を見ている。

……　今日は……　満月か……

「あ，士郎，こっちに座って～」
俺に気づいて，手を振って俺を呼んだ。
その声を聞いて，俺も切嗣にいる縁側の方に座った。
「士郎はさあ，どんな大人になりたいの？」
「え？」
どんな大人になりたいので聞かれた，
「……　俺は……　ただ守りたい物の為に……」
「違う，そうじゃなくて，どんな大人かで聞いているよ。」
「俺は……」
どんな人になりたいとか，どんな理想を持っているか，今の俺はそんな事，一度も考えていない。正義の味方のくせに，守れない人が多過ぎだ。

「僕はね，正義の味方になりたかった。
「……　そうか……」
意外はない，あるのは，悲しみだけ。
その言葉を言って，少し息を嘆いた。
「士郎には，僕の魔術刻印を継承させたいと思う。」
「え！」
「当然今からは危険だし，士郎は元々衛宮の血が流れていないから，失敗したら死ぬし，受けるか受けないは士郎の勝手だ。あ，継承する術は人を頼んでいるから心配しないで～」
そう軽軽く言った。死ぬのよ，普通に，然も受けたら激痛が毎日襲ってくるになるはずだ。
まぁ……　痛みは慣れた
「ちょっ……　ちょっと待て?!いきなりは！」
「士郎，頼む，僕の話しを最後まで聞いてくれないか？」

真面目な顔だった。そのような顔を出すと，こっちも何も聞けなくなった。

「昔はね，正義の味方になりたかった。世界の為，人間の為に体を貼った。然し今になってようやく気づいた，僕の過ち，大切な人を切り捨てる過ち……」

「……」

何も言えない，イヤ，言える立場ではない。

「だから士郎……後悔するな，幸せになって欲しい。……後……イリヤは頼んだ。」

まるで遺言を言うような感じ。いや，遺言だ。

故に，

「……大丈夫だよ爺さん，俺は必ず後悔しないし，幸せになって見せる。それにイリヤとか何とかも守って見せる，其れに，」

少し笑顔を作って，

「爺さんは俺の中の正義の味方だよ，例え他の人が何言っても，爺さんは俺にとって正義の味方だよ！だから……心配すんな……」

そう言って，切嗣は笑った。

「……そうか……ありがとう……士郎」

そして，切嗣は目を瞑った……

切嗣は行った……でも！

彼の最後は幸せになって行ったはずだ！